



雁頭沢遺跡

(第6次・第7次)

住宅建設及び工場建設に伴う
緊急発掘調査報告書

1994. 3

長野県原村教育委員会

表紙地図10,000分の1 ○印が雁頭沢遺跡

序

本書は、住宅の建設及び工場建設に伴って原村教育委員会が今年度実施した発掘調査の報告書です。雁頭沢遺跡のある尾根は近年宅地化がすすみ、山林や畑であった土地に住宅が建設されるケースが増えてきました。こうした開発の流れの中で、いかなる形で遺跡を保護していくか、最も妥当な方法を検討しているところですが、このたびの地点については発掘調査を行って記録保存をはかることとなったものです。

発掘調査の結果、縄文時代人の残した遺物と小竪穴を発見することができ、調査地は集落跡の中心部からはやや外れた東側の外縁部に当たるものと判断されております。

最後に、今回の調査に当たりご理解とご協力を頂いた(株)小平不動産代表取締役小平寛氏、(株)峰鋼代表取締役伊藤寿保氏、また発掘調査から報告書作成にいたる過程で、ご指導ご協力を賜った関係各位に心から謝意を表し、序といたします。

平成6年3月

原村教育委員会

教育長 平林 太尾

例 言

1. 本書は、住宅建設及び工場建設に伴って実施した長野県諏訪郡原村室内に所在する雁頭沢遺跡、第6次・第7次の緊急発掘調査報告書である。
2. 本調査は、(株)小平不動産及び(株)蜂網から発掘調査委託を受けて、原村教育委員会が実施した。(株)小平不動産分(第6次調査)については平成5年7月7日から7月27日まで、(株)蜂網分(第7次調査)については平成5年12月15日から12月17日発掘調査を行った。なお、報告書については、同じ遺跡で調査地も近接しているため、委託者の了解を得て1冊にしたものである。
3. 発掘調査における遺構等の実測記録は、五味一郎と井上智恵子が行い、写真撮影は五味が行った。遺物整理・遺構実測図の整理、遺物の実測、拓本は五味・井上、原稿の執筆は、五味が行った。
4. 出土品・諸記録は原村教育委員会で保管している。
なお、本調査関係の資料には、53の原村遺跡番号を表記した。
5. 発掘調査から報告書作成にいたる過程で、長野県教育委員会文化課指導主事小平和夫・小池幸夫・春日雅博、武藤雄六の各氏にご指導ご教示を賜わった。記して厚く感謝申し上げる次第である。

目 次

序・例言・目次

I 調査に至る経過
II 発掘調査の経過
III 遺跡の位置と環境
IV グリッドの設定と調査の方法
V 遺跡の層序
VI 遺構と遺物
VII ま と め

参考文献・発掘調査団名簿

I 調査に至る経過

雁頭沢遺跡は昭和54・57・63年度・平成4年度に発掘調査が行われ、本年度も個人住宅建設に伴い第5次調査を実施している。

第6次調査は、㈱小平不動産代表取締役小平實による宅地造成にかかるもの、第7次調査は㈱峰鋼代表取締役伊藤寿保による工場建設に伴うもので、長野県教育委員会の指導を受ける中で協議を行った結果、発掘調査で対応することとなり、それぞれ平成5年6月28日付と平成5年12月8日付で委託契約を行い調査を実施したものである。

第6次調査の調査対象箇所は用地内の宅地造成部分であり、平成5年7月7日から7月27日まで実施した。第7次調査については用地内の工場建設敷地分を平成5年12月13日から12月17日にかけて調査した。



第1図 雁頭沢遺跡調査地区と調査風景（北から・第6次調査）

表1 雁頭沢遺跡と付近の遺跡一覧

番号	遺跡名	旧石	縄文					弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考
			草	早	前	中	後							
11	阿久		○	○	○	○	○				○		昭和150~54年・平成5年度発掘	
12	前沢					○						○	昭和155・61年度発掘調査	
17	白ヶ原					○						○	昭和152年度発掘調査	
18	前尾根					○								
19	南尾根					○								
20	前尾根					○	○				○		昭和144・52・53・59年度発掘調査	
21	上居沢尾根					○	○					○	平成4年度発掘調査	
22	清水					○								
25	裏尾根					○								
26	家下					○					○		昭和159年度発掘調査	
27	關成沢					○					○		昭和62年度発掘調査	
28	宮平										○			
42	居沢尾根						○	○					昭和150・51・52・56年度発掘調査	
43	中阿久					○						○	昭和51年度発掘	
44	原山					○							昭和150年一部破壊	
45	広原日向	○				○	○				○		昭和158年度発掘	
46	宿尻		○			○						○	平成5年度発掘調査	
48	楡の木					○							昭和153年一部破壊	
53	雁頭沢					○						○	昭和154・57・63, 平成4・5年度発掘調査	
54	宮ノ下		○			○						○	昭和157・58年度発掘調査	
55	中尾根					○	○							
56	家前尾根					○							昭和151年一部破壊	
57	久保地尾根					○							昭和151年一部破壊	



第2図 雁頭沢遺跡の位置と付近の遺跡 (1/20,000)

II 発掘調査の経過

第6次調査

- 平成5年7月7日 発掘予定地の草刈りを行い、グリッドを設定する。
- 7月8日 グリッド設定の続きを行い、グリッド堀を開始。
- 7月15日 グリッド堀。縄文土器片が散見される。
- 7月16日 グリッド堀。
- 7月20日 グリッド堀を続ける。VIC-47とVIJ-47グリッドにて年代不詳の黒色土の落ち込みを認める。下方のVIJ-50グリッドは黒色土層が厚く、河川に伴うと思われる40cmまでの礫が出土する。
- 7月23日 グリッド堀。また、昨日の2ヶ所の落ち込みの調査。VIJ-47は調査の結果攪乱と断定する。VIC-47の落ち込みは確認のため一部を掘り下げたものの性格をはっきりせず、北側へ続くためVIC-48を拡張する。
- 7月26日 グリッド堀。VIC-47・48の落ち込みは、遺構かどうかの確認ができないため更にVIC-49まで拡張して調査した結果、石灰粒や針金が内部より出土し鉄の跡が検出されたため近代のものと判断する。
- 7月27日 グリッド堀。杭抜き等片付けを行い調査を終了する。

第7次調査

- 平成5年12月13日 発掘の準備を始める。
- 12月15日 グリッド設定を行い、グリッド堀を開始。VIIIH-47とVIIIH-43グリッドにて礫を伴った小竪穴を検出する（小竪穴87と88）。45列では2列のローム混じり黒色土の溝状の落ち込みが検出される。
- 12月16日 グリッド堀。45列のグリッドを拡張し、溝状の落ち込みの一部を調査するが、沙などに伴う砂等も検出されず石灰粒の混入などから攪乱と考える。小竪穴調査。発掘区全体写真撮影。
- 12月17日 機材の片付けを行う。小竪穴の実測を行い調査を終了する。

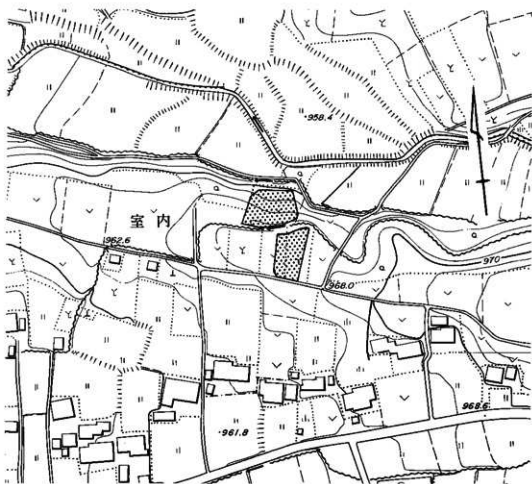
III 遺跡の位置と環境

雁頭沢遺跡（原村遺跡番号53）は、長野県諏訪郡原村室内にある。原村役場に近いなど地理

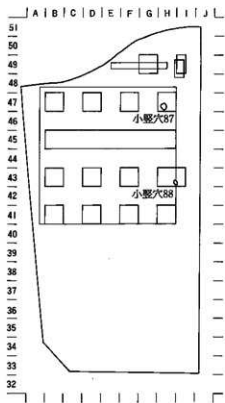
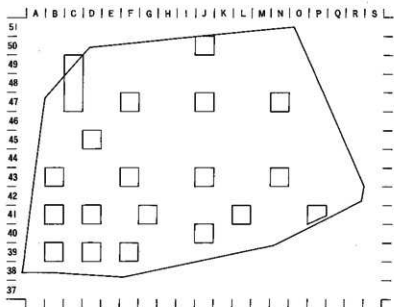
的條件に恵まれていることもあり、近年急速な宅地化が進んでいる。

遺跡は北の大早川、南の阿久川によって解析された東西に細長い尾根上に位置する。北側はかなり急な斜面となっているのに対し、南側はなだらかに傾斜をもつ。標高は960m前後を測る。これより西方約1.7kmの同じ尾根筋には国史跡の阿久遺跡がある。

第6次調査地点は、北向きのかなり急な傾斜面であり標高約966~960m、地番は原村11,794と11,792-1である。第7次調査地点は標高約967mで尾根台上の平坦部にあたり地番は11,804-1である。



第3図 雁頭沢遺跡発掘調査区域図・地形図 (1/2,500)



第4図 宅地区画とグリッド配置図
(上が6次、下が7次)

IV グリッドの設定と調査の方法

第6次調査では、地形の傾斜に合わせてグリッドを設定したため、主軸は磁北より11度10分東へ振れている。東西方向は2m間隔で西からアルファベットをふり、南北方向は南から算用数字をふった。各グリッドは、たとえばVIC-47のように表記して特定した（先頭のVIは第6次調査の意味）。第7次調査では工場の敷地に合わせてグリッドを設定しており、主軸は磁北より17度東に振れている。グリッドの特定は6次調査同様で、たとえばVII B-41のように表記した（先頭のVIIは第7次調査の意味）。いずれも調査は2m×2mグリッドを手堀で行い、第6次調査では敷地面積706㎡のうち83㎡を、第7次調査では敷地面積219㎡のうち84㎡を調査した。なお原則としてソフトローム層までの調査である。

V 遺跡の層序

第6次調査

ここでは斜面中段のVIB-43グリッドの層序を基本層序と考え、おおまかな観察結果を記しておきたい。

- 第I層 茶褐色土層 細かいロームを含む客土と思われる土層。厚さ10～20cmで締まりがない。
- 第II層 黒褐色土層 森林の表土層と思われ、粘性がありやや締まる。厚さ5～20cm。
- 第III層 茶褐色土層 第II層より明るく粘性締まり良好。5～15cmと薄い。第IV層へ漸移する。
- 第IV層 黄褐色土層 いわゆるソフトローム層。

第7次調査

基本層序は第5次調査とほぼ同様である。

- 第I層 茶褐色土層 耕作土層。これ以下の層とは不整合である。厚さは15～25cmで、所により10cmまでのローム塊を含む。
- 第II層 黄褐色土層 いわゆるソフトローム層。なお、この層まで耕作等で削られハードローム層がII層となっているグリッドもある。

VI 遺構と遺物

調査で発見した遺構は、6次調査における縄文時代中期中葉の小竪穴2基であり、遺物は6・7次調査一括で縄文時代中期土器片72点、石器21点、炭化物1点がある。遺構外遺物については時期別に若干の説明を加えてみたい。

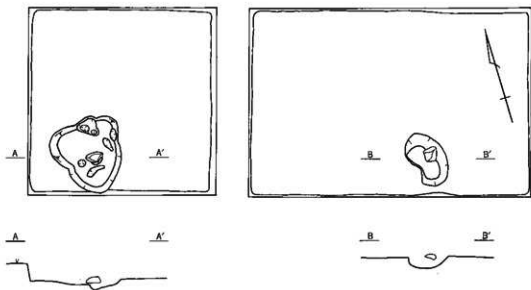
1. 小 竪 穴

(1) 小 竪 穴 87

VIIH-47グリッドで検出調査した。平面形は不整形で82×76cm。深さ9cm。壁の立ち上がりはだらだらとしてはっきりせず、底面も小穴がいくつかあって整わない。埋土は、黒褐色土で50mmまでのローム塊と、5mmまでの炭粒をわずかに含む。遺物としては中央部から大きな礫を浅く叩きくぼめた安山岩製の凹石1点と、埋土中から中期中葉の井戸尻式と思われる櫛形文土器片2点(接合する)が出土した

(2) 小 竪 穴 88

VIIH・VII I-43グリッドで検出し調査した。平面形は不整形円形で60×35cm、深さ10cmを測る。壁の立ち上がりはやや急斜で底面は丸い。埋土は茶褐色土でわずかにロームを混入する。内部か



第5図 小竪穴87(左)88(右)実測図

らは地元の安山岩の礫1点と、遺物としては黒曜石砕片が1点出土したのみである。

2. 遺構外出土遺物

土 器

グリッド出土と表採された土器片で72点ある。初頭の九兵衛尾根式、後葉の曾利式が認められるが、細破片が多く時期を特定できないものが大部分である。いずれも縄文時代の土器片であるが小片が多く、埴輪時期のはっきりしたものは、第5図1の縄文中期曾利IVの口縁部、1点のみである。第5図2は、縄文時代中期初頭の土器片であり、半截竹管文を特徴とする。焼成は良好で赤褐色を呈し、石英・長石と風化した黒雲母を多く含む。VII F-45グリッドから出土した。



第6図 土器拓影と実測図

VII ま と め

第6次調査は北向きの斜面であり、ある程度予測していたことでもあったが、住居址等の遺構を検出することはできなかった。しかし尾根の上部に近いグリッドからは縄文時代の遺物を散漫ではあるが発見することができた。これらは、今までの調査で発見されているものと、ほぼ同時期であり、調査地点は本遺跡の縄文時代集落跡の東北外縁部にあたるものと思われ、その様相の一端をうかがうことができたといえよう。

一方第7次調査地点は第5次調査の隣接地であり、やはり後世の攪乱が顕著で保存状態が悪かったものの、縄文時代の小竪穴2基を検出し調査することができた。また縄文時代の遺物をわずかではあるが発見できた。これもやはり、本遺跡の縄文時代集落の東外縁部の様相の一端を伺い知る資料といえよう。

最後に、関係者各位ならびに発掘調査にたずさわった方々に厚くお礼申し上げる次第である。

参 考 文 献

- 1985.07 原村役場『原村誌 上巻』
- 1989.03 原村教育委員会『原村の埋蔵文化財16 雁頭沢遺跡（第3次）住宅団地造成に伴う緊急発掘調査概報』
- 1993.03 原村教育委員会『原村の埋蔵文化財21 雁頭沢（第4次）・下原山茂佐久保（第3次）遺跡 平成4年度 住宅建設に伴う緊急発掘調査報告書』
- 1994.03 原村教育委員会『原村の埋蔵文化財23 雁頭沢遺跡（第5次）住宅建設に伴う緊急発掘調査報告書』

第6次・第7次調査発掘調査団名簿

団 長	平林 太尾（原村教育委員会教育長）					
調査担当者	五味 一郎（原村教育委員会）					
調 査 員	井上智恵子					
調査参加者	第6次調査	清水 豊一	長林ときわ	五味としゑ	平林 途雄	
		行田すみこ	小林 正一	（順不同）		
	第7次調査	清水 正進	小林 正一	宮坂とし子	小林 静子	
		藤原智恵子		（順不同）		
事 務 局	平林今朝二（教育次長）		大口美代子（庶務係長）		宮坂 道彦（主任）	
	伊藤 佳江 平出 一治		平林とし美		五味 一郎	

原村の埋蔵文化財24

雁頭沢遺跡 (第6次・第7次)

住宅建設及び工場建設に伴う
緊急発掘調査報告書

発行日 平成6年3月25日

発行 原村教育委員会
長野県諏訪郡原村

印刷所 日本ハイコム株式会社
塩尻市北小野4724
TEL 0263-56-2111

